北海道言語文化研究　　北海道言語研究会
No. 18, 201-205, 2020.

室蘭工業大学言語科学・国際交流ユニット「室蘭工業大学の語学教育における より良い動機づけのための多面的研究」研究成果報告 - 第 3 回 - *

塩谷　亨、島田　武、ブライアン　ゲイナー、山路奈保子

"Research Project Report: Studies on Better Motivation in Foreign Language Learning from Various Angles -Part3-" by Linguistic Science and International Relations Research Unit, Muroran Institute of Technology

Toru SHIONOYA, Takeshi SHIMADA, Brian GAYNOR and Naoko YAMAJI

要旨：本稿は、室蘭工業大学ひと文化系領域言語科学・国際交流ユニットが 3 か年計画で取り組んでいる言語文化と語学教育に関する研究と教育の成果報告である。当該ユニットに所属する教員が 3 つのグループを組織し、言語学、言語教育、異文化理解の観点からいかにして日本語教育を含む外国語教育の改善に取り組んできたのか、その成果を広く公表することを目的とする。今回は、成果報告の第 3 弾である。

キーワード：外国語教育　動機づけ　教授法　対照研究　異文化理解

1.　背景

室蘭工業大学の教養教育に携わる教員の内、特に言語や文化に関する教育と研究を専門とする 12 名の教員から、言語科学・国際交流ユニットは構成されている。このユニットは、

毎年度、室蘭工業大学における語学教育および異文化理解教育をいかによりよいものにするかを目標に設定し、グループ研究プロジェクトに取り組んでいる。平成 29 年度からは、3 か年計画で、「室蘭工業大学の言語教育におけるより良い動機づけのための多面研究」というテーマの下、各教員が次の 3 つの視点から語学教育および異文化理解教育の改善を目指して研究に関わっている。

(1) 外国語教授法の視点から：語学教育方法の改善と、それと並行した学生の動機づけの強化を図るための効果的な教育方針、教育計画、教育実践の探求を行う。
(2) 対照言語学の視点から：言語の普遍性と多様性を意識させ、学習言語そのものへの興味関心を喚起させることにより、動機づけを高めるための教材の特定化と構築を目指す。
(3) 異文化理解の視点から：体系的言語学習と、それと並行した学習対象言語を用いた異文化間接触体験の、それぞれ互いに効果的な動機づけとして作用させるための指導法について考究する。

平成29年度の成果報告は、三村(2018)として、平成30年度の成果報告は橋本(2019)として、それぞれ公表している。以下は、この研究成果を継続・発展させる形で行われた、令和元年度のプロジェクト研究の成果報告である。

2. 研究成果の概要

2.1　外国語教授法研究グループ

2.1.1　令和元年度研究活動

From a two-year longitudinal study, we collected different types of English language data from approximately 80 undergraduate students.

This primary data consisted of: recorded English interviews with students; English conversation transcripts; and survey data on student motivation and flow experiences during English communication tasks. We combined data this with secondary data about students' TOEIC scores, extensive reading, and motivation.

These combined data were analyzed using both quantitative and qualitative methods.

In 2019, results from this data analysis were presented at an international conference in the United States. In addition, a research article was submitted to the Journal of ASIA TEFL and is currently undergoing peer review. We also have a second research article in preparation and aim to submit that to the journal of Studies in Second Language Edition in early April. We have also submitted a presentation proposal for the 2020 annual conference of the Japan Association of Language Teachers, to be held at Tsukuba University in November.

We will also host a faculty development seminar for English teachers in Muroran Institute of Technology. The seminar will outline our main research findings and make practical suggestions for improving students English language learning at Muroran Institute of Technology.

2.1.2　地域小学校研究計画

We carried out a teacher seminar for the principal English teacher at 登別市立富岸小学校 in September 2019. At this seminar we explained about the challenges of teaching English to young learners, and suggested different classroom activities for overcoming these challenges.

2.2　対照言語学研究グループ

対照言語学研究の視点から、学習者が習得すべき言語の諸側面のうち、過去２年間は音声と文法を取りあげ、指導と教材開発の方策を提案した。今年度は、もう一つの学習者が習得すべき言語の重要な諸側面である語彙を取り上げ、その中でも特に学習上重要な項目を吟味し、英語と日本語の語彙上の類似点並びに相違点について学生に意識させ、学習言語自体への興味を喚起させるような教材作成と方法論の構築を目指した。語彙及び語彙に関連する分野として、(1)和製外来語と(2)品詞特有のポジションの 2 点に着目した。

2.2.1　和製外来語

テレビ、ハンドル、レントゲンなどの和製外来語は、日本人の日常会話において頻繁に使用される。その中には、英単語やその一部が借用されているため、正規の英語表現であると思われているが実際には使用されていない表現と、英語以外の言語から借入されているが英語のように思われている表現がある。どちらも実際の英語使用の際には、別の英語表現を用いる必要がある。そこで英語総合演習の授業において、これらの表現と英語本来の表現を学生に提示し、小テストを解かせることで正しい表現の定着を図った。提示例としては次のようなものがある。

例：アルバイト part-time job　アフターサービス after-sales service　ベビーカー stroller
　　ユニットバス modular bathroom　マンション condominium

小テスト後、各表現に関して「和製外来語であることを知っていたか」「本来の英語表現を知っていたか」という 2 点を尋ねた。その結果、「アルバイト part-time job」のように和製外来語であることも、対応する英語表現もよく知られているもの、「マンション condominium」のように和製外来語であることはよく知られているが、対応する英語表現はあまり知られていないもの、「ベビーカー stroller」のように和製外来語であることも、対応する英語表現もよく知られていないものがあることが判明した。今後は今回得られた和製外来語の認知度を参照して、学生への提示方法を改善していきたい。

2.2.2　品詞特有のポジション

世界の言語の文法システムの類型として、日本語は全般的に膠着語タイプ（文法的関係等を接辞等の付加によって表す）の傾向を示すのに対し、英語は名詞句については概ね孤立語タイプ（文法的関係等を活用や接辞ではなく語順により表す）の傾向を示す。英語以外に同様の傾向を示す言語としては、中国語やポリネシア諸語等がある。これらの言語ではしばしば品詞が特有のポジション（この位置にはこの品詞が表れる）を持っている。そのような品

詞特有のポジションを理解し、意識することは英文を自ら作る際にはもちろん、他人が書いた英文を理解する際にも極めて重要な要素となる。このような品詞特有のポジションは、複数の語から成る句の構造、そして複数の句から成る文の構造の中で捉えられるものであり、しばしば、句や文の構造は、あたかも化学式のような形式で表記されることがある。そのような形式での説明は、むしろ工学専攻の学生には比較的イメージしやすいものであろうと考えられる。そこで、TOEIC 英語演習 B において、そのような形式を一部導入した説明を試みた。

名詞句の代表的な構造は例えば、[冠詞＋形容詞＋名詞＋前置詞＋ほかの名詞句]のような式で表すことができる。このままでは、長すぎて実際の場面では使いにくいと思われるため、これを分解して、更に TOEIC の Part5 及び Part6 問題でしばしば出題される形に直して、以下のようなシンプルな式のセットでの説明を試みた。

(1) [冠詞　形容詞　X　]　X は名詞相当語句のポジション
(2) [冠詞　X 前置詞 …]　X は名詞相当語句のポジション
(3) […形容詞　X 前置詞]　X は名詞相当語句のポジション
(4) [前置詞 X …　]　X は名詞相当語句のポジション
(5) [冠詞　X　名詞]　X は形容詞相当語句のポジション

残念ながら、今回は部分的な試行にとどまり、効果の検証までは至らなかったが、このような式という目で見て理解しやすい形式を導入することにより、学生に品詞の機能や英語の文や句の構造について意識させながら英語を処理する機会を提供できたのではないかと思われる。今後他のタイプの句の構造も含めて、試行を重ねてきたい。

2.3　異文化理解研究グループ

本学で実施されている海外研修やその他の異文化理解プログラムについて、学習動機付けと語学力強化の可視化を可能とするための事前活動と事後評価のあり方についての検討を行い、プログラム間での比較対照も可能にする評価方法および分析方法の導入を試みてきた。プログラム参加者による事後評価の共通化については試行段階を経てある程度の定式化が実現している。分析方法については、各プログラムの個別性をどのように評価軸に取り入れるかが今後の課題として残されている。

3.　おわりに

以上、室蘭工業大学ひと文化系領域言語科学・国際交流ユニットの令和元年度のグループ研究プロジェクトの概要と成果を報告した。本プロジェクトはこれが最終年度になるが、今後も、過去 3 年の成果を発展させる形で、さらに、言語・文化教育の改善を継続していきたい。

謝辞

*　本研究報告を編集するに当たり、言語科学・国際交流ユニットのメンバーから多大な協力を賜った。ここに感謝の意を表したい。

参照文献

三村竜之. (2018)　「室蘭工業大学言語科学・国際交流ユニット『室蘭工業大学の語学教育におけるより良い動機づけのための多面的研究』研究成果報告」　北海道言語文化研究、第 16 号、131-134.

橋本邦彦. (2019)　「室蘭工業大学言語科学・国際交流ユニット『室蘭工業大学の語学教育におけるより良い動機づけのための多面的研究』研究成果報告 - 第 2 回 - 」　北海道言語文化研究、第 17 号、201-205.

執筆者紹介

氏名：塩谷　亨（しおのや　とおる）
所属：室蘭工業大学大学院工学研究科・ひと文化系領域
Email：shionoya@mmm.muroran-it.ac.jp

氏名：島田　武（しまだ　たけし）
所属：室蘭工業大学大学院工学研究科・ひと文化系領域
Email：shim@mmm.muroran-it.ac.jp

氏名：ブライアン　ゲイナー
所属：室蘭工業大学大学院工学研究科・ひと文化系領域
Email：bgaynor@mmm.muroran-it.ac.jp

氏名：山路　奈保子（やまじ　なおこ）
所属：室蘭工業大学大学院工学研究科・ひと文化系領域
Email：yamaji@ mmm.muroran-it.ac.jp.